

大丸呉服店

長谷川時雨

青空文庫

——老母のところから、次のような覚書をくれたので、「大丸」のことはもつと後にゆつくりと書くつもりだったが、折角の志ゆえそのまま記すことにした。

小伝馬町三丁目のうなぎやは（近三）きんさん明治廿四、五年ごろまでであったと思います。

大伝馬町四丁目（この一町だけ通はたご町）とおり大丸呉服店にては一月一日表戸を半分おろして、店を大広間として金屏風きんびょうぶを立てまわし、元旦がんとん一日は凡そおよ（そのころで三百人以上）三、四百人の番頭、若者、小僧一同に大そうなごちそうが出る。お酒も出る。

福引その他、実に一年中を一日に楽しませるので、近所の子供らも皆女中小僧をつれて遊びにゆき、羽根をつくやら、鞠まりなげ、楊よ弓うきゆうもあり踊りもあれば、三味線もあり、いろいろと楽しませ夕方帰りには、山ほど土産をそれぞれにくれました。

大丸の符牒ふちよう

(イエトモヲコルコトナシ)

とか聞いておりました。

朝は早くから小僧が「おきろよおきろよ。」と呼んで、見世みせじゆ中十人ぐらいで、ぐるぐる起して廻りました。客がはいってく

ると、帳場の者が——帳場に

甚四郎とか

才助とか大書した、三尺ばかりの紙札の下に、各めいめい自の横に、小さな帳場格子とかけ硯すずりをひかえて、ずっと並んで坐っています。客は名札を見て、気の合いそうな売手のところへと上つてゆきま
す。

女客なれば、クノイチクノイチという

男客なれば、ハツコウハツコウという

クノイチと言えば店中女客と思ひ、ハツコウといえは男客だと
知ります。

不一のクノイチは不器量な女の事

不一のハツコウは嫌な男の事

ト一のクノイチはよき女人のこと

ト一のハツコウはよき男のこと

客の買物の金高によつて御馳走ごちそうがちがう。その符牒は、

お菓子なれば「きしるし」という。おそばなれば「とくいし」

という。御飯なれば「ふしんかた」という。肴さかななれば「またろ」

という。またあい(肴) かもしれませぬ。

大門通り右側に、たはらや(田庄) 呉服大問屋、大丸その他へ
おろし店。そのさきに市田、これも大問屋、市田の方は多く織も
のと模様もの、上々品ばかり、人形町その他の呉服店へおろす。

大門通り左側は角からずっと金物店ばかり、この辺を通ると店
々にならんでゐる番頭若者らが、よき女子の時は煙草盆タバコぼんのはい
ふきを二ツ叩たたく。それをまた隣りの店で二ツたたき、つぎつぎに

知らせるのです。大丸のまむこうに、大丸出入りの菓子や「かめや」あり、はたごちよう旅籠町通りに大丸とならんで大丸の糸店いとだなと扇店があり、「みすや針店」のとなりが森田清翁という、これも出入りの菓子や。十月十九日べつたら市の日には店へ青竹にて手すりをこし拵らえ、客をはかつて紅白の切山椒きりさんしょを売りはじめます。たいした景気、極々よき風味なり。向側の「かめや」にても十九日にはやはり青竹にて手すりをこしらえ、かしわもち柏餅をその日ばかり売ります。エビス様の絵の団扇うちわを客にだしました。この家は神田小柳町からの大火で店蔵をおとして、主人が気が変になって、四、五年の後店もなくなりました。とおりあぶらちよう通油町の大通りの向う側の横町は南新道、それとならんだ通りが大丸新道、この一丁は、大丸

の土蔵の窓——裏側なのです——に金網が張つてあり、湯殿も、台所もみなおなじ。

以上、老母からの手紙は、たどたど 辿々しい文ではあるが、大丸という大丸服店を通して、そのうらのお店ものたなの奴隷生活がうつしだされている。一年に一度の、この目覚ましい慰安的な、解放したようでその実解放しない、人目を眩くらす華々しいやり方と、終りの方に書いてある、窓々の金網のことを見すごすことは出来ない。

あたしは震災の幾年か前、ある怪談会が吉原水道尻しりの引手茶屋ひきてぢややで催された時にいつて、裏の方から妓楼ぎろうの窓を見たことがある。そこにも金網が張つてあつた。娼妓しょうぎの逃亡を怖れてだといった

が、それより幾年前、帝都の中央まんなかの日本橋に、しかも区内のめぬきで中心点である土地ゆえ、日本国の中心といつてもよい場合の大呉服店に、そうした窓が、しかも一丁の半分以上をしめて金網が張りわたされていたという事実がある。それはあたしも子供心に知っていた。盗品をおそれるのだといったが、それならば台所の窓にまでしなくつてもよいはずである。外からの盗人を怖おそれたのではない。

理屈はやめて、大丸はその近所の者にとって、何がなし目標点だった。物珍らしい見物みものがあれば、みな大丸の角に集まってゆく。鉄道馬車をはじめ通った時もそうなら、西洋人が来たとき騒いで駈附けるのも大丸であるし、お開帳の休憩もそこであった。アン

ポントタンが知らない時分の大丸は、神田から出た北風なつらいの火事には、類焼やけるものとして、蔵くらの戸前とまえをうつてしまふと店をすっかり空にし、裸ろうそくを立てならべておいたのだという、妙な、とんでもない巨大おおきな男おとこ店だなだった。

大丸はおおでんま大伝馬はたご旅籠町から大門通りへ折れまがつて裏まで通つた、一丁の半分以上を敷地にして幾戸前かの蔵と店とで、糸いと店だなによつた方に広い土間があつた。表附あけきは明あけつぴろげではなく、土蔵造りのところどころに間口があり、そのほかは上部だけ扉があがつて、下部は土で塗つてあつた。大戸の上げおろしが、あの広い間口では大変だつたせいもあるうが、その中側が一軒以上ぐりりとタタキになつてゐる土間だつた。老母の覚書にもある通り

の紙の名札が、高い欄間らんまから並べて張つてあつたが、それは店さきの畳からは、三間以上も奥の方だつた。角の大黒柱を中にして、座りどころにも位置があるらしく、甚四郎、才助などと書いた両側に専属の小僧の名が、三ツも四ツも並べて書きつけてあつた。

店さきの諸所に、小切れをいれた箱が据すえてあつた。あたしの祖母は連つれあ合あいが呉服の御用商人であり、兄がやはり絹呉服の御用商であつた関係か、大丸とはゆかりがありげであつた。あたしたちがよい事をしたおりや、若い娘客に何か与えなくなつたおり、ちよいと曳ひきず裾すそのおつまをとつて出かけてゆくさきは、いつも大丸だつた。彼女がはいつてゆくと、誰かしら顔を見た番頭が立つて来て、小切れ箱から絞しぼりばなしをつまみ出した。赤いのや、濃い

紫や、浅黄のが取りだされて八釜やかましぼりとか、麻の葉とか、つ
しぼりとか、赤の黄上げのだとか、種々な鹿かの子絞こりにも名のあ
るのをあたしは知った。祖母はその二、三種を、手ごろな有りぎ
れのまま、ザクリと手にさげて帰る——あたしたちの目はかがや
いたものである。その裂きれ地が、もらった嬢さんたちの結綿ゆいわた島
田だにもかけられ、あたしたちの着物にもじゅばんの襟にもかけ
られた。帯にもなった。

ある日、大丸に大変な人ばかりがした。西洋人とうじんが買物に来てい
るのだという。いってみると、太い赤い頸くびすじに金茶色の毛がモジャ
モジャしている、眼鏡をかけた男と、キチキチした、黒つぽく光
る上衣うわぎに、腰の方だけ沢山ひだを重ねて広がった服をきている、

意地のわるそうに尖^とがった、茶色の眼の、狐^{きつね}のような女が、ボンネットをかぶつて、見物にかけつけたものを睨^ねめかえしていた。小さくて瘦^やせている犬をつれていた。子供の目にも、今思いだしても、決して上品なよい人柄とは思えなかつたので、ものめずらしくはあつたが、なんとなくこの西洋^{とうじん}人を軽蔑した。その時分、黒いやせた、茶色の斑点が額にコブのようにある洋^{いぬ}犬をカメと呼んだ。だが、そのおり人々が口にしたカメは、連れていた小犬ではなく、どうもその女の方をさして呼んでいた様子だった。西^{けとう}洋^{しん}人も傲慢^{ごうまん}だった。泥靴のまままで畳の上へ上つていった。

お正月元日は、大戸の上がとところどころ明けてあつた。お茶番のいる広い土間の入口の潜^{くぐ}り戸をはいつてゆくと、平日^{いっも}に増して

お茶番の銅壺どうこは煮にえたち、二つの茶釜ちやがまからは湯気がたつてどこもピカピカ光っていた。すぐ前の別座になっている、大格子の中が大番頭や、支配人や、一番番頭のいるところだった。頭の上の神棚にもお飾りが出来てお燈とうみよう明あきが赤くついている。そこの前の大飾りは素張すばらしい鏡餅かがみもちが据えてあつた。海老えびもピンとはねていた。

夜があけるとすぐ羽根の音である。いつも番頭の並んでいる区画に、ずっと金屏風が——立派な画のもある——が廻めぐらされて、そのうち側で羽根をつくののだが、それは朝のうちだけのことで近所の女たちが、見物に出かける時分には、屏風の前の方へ出てきている。小僧も、若者も、番頭も入交いりまじり方で、ゆかりのある家の

女供や近所の者が、風はなし、自由に広しするので遊びにゆくので、とても壯観な位に、しまいには屏風もとりはらつてしまつての追羽根になる。騒々しい位の羽根の音だ。

糸店いとだなによつた方に舞台があつて、立派な衣装をつけた芝居を番頭たちが演やつている。そこも見物はギツシリだ。だがこうした足どめ策をしても、やっぱり外に忍び出るものは多かつた。

この広い店、中央の羽根つき場になる個所はずつと天井が高く、あか明りとりになつていて廻りだけにぐるりと二階がある。お客を接待する座敷の方は立派できれいだが、それでも薄暗かつた。なぜなら、中央の広場の方の手すりから光りはくるが、肝心な表通りへ面した方には、たしか窓もない盲めくらだて目建だてだったからである。窓

があつたとしても、小さなので、細かい、格子ででもあつたのであろう。そこから明りがさしたようには覚えていない。床の間には、小谷さんの娘さんがさした、大きな松竹梅の生花が飾つてあつた。合宿室も、そうした二階のそこらにあつた。台所に近い蔵前には、各自の姓名なまえをかけた雑煮箸ぞうにばしの袋が、板張りに添つて細い板割で造つた、幾筋かの箸たての溝に、ずらりと並んではさんであつた。

ある番頭が、羽根を突いていて、暑くなつたので糸織の羽織をぬいで小僧に渡した。羽織の裏は大きな帆かけ船があつて七福神が乗つているのだつた。宝と書いてある帆は縺しゆす子で盛上つていた。帆きんしづなの金糸をひくと、帆がひっくりかえつて——アンポンタン

は多分宝ものが沢山積んであるものだろうときめていたからよく見もしないで、蜜柑みかんまきのみかんを拾うのに無中だったが、その船のうちこそ、彼らが給料をのこらずかけたといつてもよい、手のこんだ不思議な細工だということであつた。禁欲された彼らが、不自然な生活は哀れなものであつたろう。誰も彼も胃病患者に違いない——もしくは十二支腸虫患者か、みんな生氣のない、青びようたんみたいだつた。

だが、不思議に元日に間違ひはなく——もつとも大僧より小僧の方の悦よろこびの日だつたのだ。大きいものはもう昼から夕方になると、段々にかげをかくしてしまつた。そして無邪気な、近所のものがのさばりかえつた。

大丸の神棚の下に納まっている大番頭たちは、みんな近くに家を持っていた。蔵附きの中流以上の構えである。面白いことに養子制度で、どの家でも細君が家附きの娘だという。多くの中から目ぼしい若者を養子に抜いてゆくのであろう。だが、大番頭の息子も小僧と一緒に終業するのかどうかそれは知らない。あたしの知っている大番頭さんの娘は、おあぐさんにおたをさんという姉妹だった。そのお母さんも、そのまたお母さんも家附きの娘だ。とても丁寧な人たちで——一体にどこの家の女の人もそうだったが——お風呂であうと板の間でも両手をつけて、寒いのに何時までも御挨拶ごあいさつがある。時候が冷えますということから、朝晩めつ

きり寒くなつたこと、皆様おかわりがなにかということ、先日は何々して何々がなにとやらと、とても閑談的なのである。

おあぐさんという名は妙だが、下町ではよく阿久利という名をつける。大概大事な子で、子育ての悪い家をつける者だという。

このおあぐさんが、年寄り連の理想的な娘なので、あの通りにお優しく、しとやかな声を出さなければいけないと、よく引ひき合あいに出して叱しかられた。おあぐさんの家は向う新道の角から二軒目で、

二階と塀を通りにもち、玄関はわざとのように、敷石のある露路に古い磨いた格子戸をもつていた。冬は朝早くから寒かんざらいといつて長なが唄うたのおさらいをする。午後おひるつからもする。三味線の音がよく聞えるので、ソラおあぐさんはお浚さらいだと私も三味線をもた

されるので、その方角は鬼門だった。

その他、大丸直属の仕立屋や縫箔屋ぬいはくやが幾軒かあった。店蔵づ

くりの、上方風かみがたの荏柄えがらぬりの格子窓で、入口の格子戸の前に長

い暖簾のれんが下っていた。帯ばかりくける家もあった。天水桶てんすいおけがあ

つて——桶といつても上に乗っている手桶だけ木で、下の天水桶

は鑄鉄いものが多かった。かなりいい金魚が飼つてあるので、金網を張

つてあるのもあった。その一軒の大仕立屋におしゆんさんという

美しい娘がいて、上方風の「油屋お染」のような濃艶のうえんなおつく

りしていた。面長おもながな下しもぶくれな顔に黒い鬢びんを張つて、おしどり

に結つて緋鹿ひかの子この上を金紗きんしゃでむすんでいた。つまみの薬玉くすだま

の簪かんざしの長い房が頬の横でゆれて、羽織をきないで、小さい前かけ

位な友ゆうぜん禅ちりめんの小ぶとんに、緋ぢりめんの紐ひものついたのを背にあてて、紐を胸でむすんでさげていた。その女ひとが狝ちんを抱いて、夕方遊びに出るのを見るのがあたしは大好きだった。

大丸の小僧はみんな馬鹿なのかと思つたことがある。大きな姿なりをして、頭髪をおかっぱのようにして、中には胸にあぶらやのような茶色の切れをかけていた——お茶盆をもつて、アーアーと節をつけて、店のはなつさきを行ったり来たりしていたからだ。アーアーというのは、おはいりという事なのだといつたが、眺めてみると好い気持ちではなかつた。

大丸と向いあつた角に仏具屋があつて、その横に交番があつたが、ある日引っこしをした。人夫が交番へ丸太ン棒を通して担い

でいってしまったので吃驚びっくりした。でも交番がとれて四ツ角が広くなつたのは具合がよかつた。何事もみんな物珍らしいことはこの四ツ角に立つて見物する最上の場所だつたから——

すみよしおどり

住吉踊の一隊が来てかっぽれを踊ると、大きな渦になつて

見物がとりまいた。梅坊主うめぼうずの連中は夕方にやってくるのでよく

人が寄つた。お正月の出初でぞめも賑やかだつた。下町の纏まとは大概あつ

まつて、ずっと大伝馬町から油町通りに列をひいて揃はしごつて梯子乗

りをする。それよりも大丸の年中行事は、諸国から出開帳でがいちようの諸

仏、諸神のお小休みだ。譬いわば嵯峨さがのお釈迦しゃか様が両国の回向院えこういんで

お開帳しなのだとか、信濃しなのの善光寺様しなのの出開帳しなのだとか——そのうちでも

日蓮宗はなは華はなやかだつた。小伝馬上町こでんまかみちように身延山みのぶさんの出張寺みづかみはあつ

たが、本所の法恩寺へお開帳はもっていった。そのかえりが一日上町のお祖師様へ立寄るのだった。大万燈や、髭ひげ題目を書いた。ひぢりめんのくくり猿をつけた大おおはば巾ちりめんの大旗や、出車だしもでた。縮ちりめん緬ゆかたのお揃いもある、しぼりの揃いもある。派手を競い、華美をつくし、見ているのも足くたび労れるほど沢山、目印を各講中ごとに押立てくるが、そのどれもがかわらないのは、気狂いかと思うほど無中で太鼓を叩たたいてお題だいもく目をど鳴ることだった。花笠を背にしている一連もあれば、男女とも手てぬぐい拭を吉原かぶりかぶりにしているのもある。胸で小意気に結んでいるのもある。

その人たちが——無数な人たちが、一時大丸の店を一ぱいに占領してお中ちゅうじき食じきをする。それから一休みして順繰りにくりだす。

先頭が両国橋へかかる時分に、まだ中頃のが足揃いをしている。

御本体が出て、お茶湯ちやとうが一番最後に出てゆく。

ある日もアンポンタンはおまつちやんと四ツ角で、その大人のめざま目覚しい狂奔きやうほんを見物していた。すると、帝たいしやくさま釈様の剣に錦にしきじ地の南無妙法蓮華經なむみようほうれんげきやうの幟のぼりをたてた出車だしの上から声をかけたものがある。

「ヤツちやん、手を出して——はやく乗った、乗った。」

学校友達の古帳面屋のお金ちやんのお父さんだった。その人は背の高いキレイナ人で、清元きよもとのお浚さらいの時に山台やまだいに乗って、二、三人で唄うたっていたことがあつて、みんなにオシイー、オシイー、とほめられた人だった。その時はじめて清元とは首を振って

唄つてしまうと、おいしいーと長くひっぱってほめられるものだと
いうことを知ったのだった。金坊のお父さんは、講中の世話役だ
から橘たちばなのもようのお揃いの浴衣ゆかたを着て、茶博多ちやはかたの帯をしめて、
お尻しりをはしよつて、白足袋の足袋はだしで、吉原かむりにして襟
に講中の団扇うちわをさしていた。

あたしたちは吃驚びっくりしているうちに、見物が抱上げて出車だしの上
の人たちの手に渡してくれた。無論上にはお金坊もおよつちやん
もいた。妙に晴がましかつたが、押上げてくれた人たちが不思議
とほこらしげにニタニタ笑っていた。日傘ほどの大きな団扇で誰
かが煽あおいでくれる——お金ちゃんのお父さんは首から拍子木ひょうしぎを
かけていて、止るところや何かで鳴らした。火の用心と赤く書い

てある腰にさげた袋から煙草タバコを出して吸った。行列が深川の高橋にかかった時、あたしは橋の上から後の方を見渡して、誰もほかに知ったものはなし、何処どこにつれてつてしまわれるのかとホロホロして帰してくれとせがんだが、もう仕用がないときかれなかつた。

憲法発布はつぷの時、大丸では舞樂の「蘭陵王らんりょうおう」の飾りものをした。これは日本橋油町の銚出車ほこだしにあつたもので、神田田町の「猿」、京橋の「閑古鳥かんこどり」と並んで、有名な日本橋の「竜神りゅうじん」とは違うが維新の時国外へ流れ出てしまった、この有名な蘭陵王の面は、アメリカにあるとかいった。大丸では当時の町総代が京都までいって織らせた、蘭陵王の着用の裂れ地きの価値を知ってい

るので、それを造つて飾つた。その日何処どこでもしたという酒樽さかだるのいくつかが、大丸の前にもかがみが抜いて柄酌ひしゃくがつけて出された。

油町側では憲法発布の由来というような、通俗的な演説会といつたふうなものを催した。そんな時にこそ大丸が会場であるはずなのだが、町内の関係で油町の加賀吉という大店で開かれた。そこはたしか山岸荷葉氏——紅葉門こうよう下で、少年の頃は天才書家として知られていた人である——の生家で、眼鏡や何かの間屋だった。年の暮のえびす講などに忘年芝居を催したりする派手な店で北新道のあたしの家の並びの荷蔵に、荷車で芝居の道具を出しに来たりしていた。その店が会場となり演説の卓つくえがおかれた。

そんな事はお江戸 開かいびやく 闕 以来のことと見えて、アンポンタンの幼い頃にも忘れない不思議な光景を残している。まず、弁者は、その近辺でも当時の新智識と目もくされたものと見えて洋服を着ていることの多いあたしの父であった。洋服が新時代の目標であったと見える。尤も、もつと 官員さんの一人もいない土地であつて見れば、私の父がハイカラだったのかも知れない。明治十二年官許代だいげん言人、今から見ればとても古くさい名だが、十二人とかしかなかつた最初の仲間の一人であつたときいている。

前の日まで、憲法ということの講釈を、若い旦那だんなたちの幾人かが熱心に聴きにきた。その人たちが世話役でもあつたのであろう。その当日も机をはこんだり、会場のしつらえを問合せに來たりし

て、いよいよ午後六時前となると、傍聴フアンの動作研究会というような集りになった。どうもまだノーノー、ヒヤヒヤが分明はつきりしないという訳なのだった。書生たちまでが一緒に並んでその稽古をやる。父はハイカラな礼服だが、朝からの祝いわいざけ酒しよに、私が大きらいな赤黒い色になっている。手はずしてあつた個かしよ処で、合図を忘れるので、ファン連は、困りきつて、演説を暗あんしよう誦しておこうと努力したが父は面倒くさがっていた。俺おれが、このコツプをこうあげたらヒヤヒヤだ、机の此ここ処へ手をやったら否ノーだ。こういう風になったら拍手だと教える。だが、やって見るとノーノーもヒヤヒヤも拍手も入交ぜとなる、何度繰返してもおんなじなので、まあいいやということになってしまった。今の言葉ならばそ

れが自然だというところだったろうが——

聴衆は表の通り一ぱいの黒山だった。解わかつたのか解らないのか、ともかくとてもおめでたい事という概念と、はちきれるほど一ぱいなお祭り気分で、ノーノー、ヒヤヒヤ、拍手喝かつさい采、何もかもメチャクチャに景気よく、弁士を胴上げにして家まで送って持ってきて来た。そのあとが馬場勝一派の長唄ながうた——馬場は浅草橋の橋手前、其処そこに住む杵屋勝三郎きねやといった長唄三味線の名人、夜一夜唄よひとようにまかせ、狂うにまかせ、市中は明るい不眠症にかかつて、そこから花瓦斯はなガスが燃え酒樽あが空いた。雪をこねかえした泥凪ぬかるみに、お酒にお腹なかの袋を破った死人がゴロゴロ転がった。

多分戸を閉めないで寝た家が多かったろう。

青空文庫情報

底本：「旧聞日本橋」岩波文庫、岩波書店

1983（昭和58）年8月16日第1刷発行

2000（平成12）年8月17日第6刷発行

底本の親本：「旧聞日本橋」岡倉書房

1935（昭和10）年刊行

入力：門田裕志

校正：小林繁雄

2003年4月2日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

大丸呉服店

長谷川時雨

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>